

第一分科会

○ 分科会の趣旨とテーマ設定

【司会】

子ども達が発表した内容を先生の視点で掘り下げ、「子ども達の成長を実感するところ」、「学校の森で目指すところ」、「現在の取組みで課題に思っているところ」等々についての議論を通じて、学校の森が少しでも良い方向に展開していくことが目的です。限られた時間ですが、皆さんの実践に根ざした意見を自由に交換して頂くことを予定しております。

- ① 中山間地において持続可能な地域づくりの大きな鍵（子育て世代の I ターン促進）を握る魅力ある教育

【生平小学校 小川先生】

ふるさとを強調して取り組んでおり、最終的にふるさとに帰ってくる子を育てることが目標。具体的には愛鳥活動の中で考える力、実行する力を育てている。愛鳥活動と里山学習をつなぐ手立てとして、子どもたちが自然と生き物の繋がりを学ぶテーマに『私たちの生活に蛾は必要か』や『水鳥のためにできること』などを取り上げている。生物多様性という観点から見ると森林に生息する蛾は受粉の役割をして森を豊かにしたり野鳥の餌になるので、野鳥のためにも私たちの生活のためにも里山が重要となる。また水鳥の餌は魚であり、魚はきれいな川が好きなので、川をきれいにするには森林が大切になる。このように森と生き物の繋がりを学んで里山保全活動に取り組んでいる。また、今年度の手立てとして、今の里山と比べると昭和30年代の里山は「生き物が豊かだった」という話を地域の方にお伺いし、自分たちもそのような里山を目指そうと活動している。こういう愛鳥活動を起点に生態系の繋がりに思いを馳せる形で里山活動に取り組んでいる。その中で子どもたちはつながりを考える力、多面的・総合的に考える力を育てている。

【南横山小学校 森井校長先生】

学校の裏山が学校林となっていて、大阪府でも自然豊かな環境に恵まれた学校であり、教科書だけでなく、本物の植物、生き物から学ぶことを重要視している。そしてPTAと地域の方が校舎横に炭焼竈を作ってくれて、子ども達は学校の学校林の木を伐って炭焼きを体験している。自然と関わり、自然の恵みの利用を子ども達同士、また地域の方とも協力して行うことを通じて、人と自然の関係を学び、地域の大人の方との交流を通じて、生きる力を育てている。和泉市といっても和歌山に近い人口減少エリアであり、地域の人々が自分たちの小学校を残すために和泉市内全域から通学可能な小規模特認校にするよう市に要請し、認められて10年たった。現在は校区内の子ども31人に対して、校区外39人となっている。学校を公開して入学希望者に見学してもらっているが、90%以上の方が自然の豊かさにひかれてと希望したと回答している。なぜか田舎の人は都会に行きたがり、都会の人は田舎に行きたがるという逆転現象が起きている。今年は1年生が抽選となるくらい多くの希望があった。学校林、自然が人を呼ぶことを確信している。

【一勝地小学校 国武校長先生】

熊本県南部で山間地の学校。「日本で最も美しい村」連合に加盟する球磨村にあり、村を上げて福祉環境づくりに取り組んでいる。その中で本校はH24年から2年間環境教育研究校の指定を受けて環境教育に取り組んできた。環境、社会、伝統文化全てを環境ととらえて地域の人たちから学

ぶ中で地域のよさに気付き、もっと好きになって発信する。更には、子ども達が率先して美しい地域づくりに参加するという行動を起こすことを目的に行っている。地域の中には棚田があり、今年から地域の方々と協力し、田植えを実施し、また棚田で作ったお米はなんでおいしいのかを小学6年生が研究をした。いい水、適度の温度差や土がコメ作りに関係していることがわかった。高齢化に伴い棚田が放棄されている。村では、もう一回、棚田の魅力を再発見し、棚田を残す活動をしていく中で、子どもたちがこういった動きを感じながら、こどもたちが行動して将来につなげる。更に、将来、その子どもたちが地域に帰ってきて、保全活動に参画する、そんな子どもたちを育てていきたい。

このような取組みの結果として、全国学力学習状況調査の中の意識調査「地域の問題について考えることがありますか」という項目で90%以上の子どもたちが「考える」と回答している。こういった活動を通じて地域のことを考えることが身についてきていると実感している。

【秦梨小学校 杉原校長先生】

実は生平小学校の児童と幼稚園・中学校は一緒という近い関係にある学校。ふるさと秦梨を愛する心を育むというテーマで平成12年度より里山再生活動を進めている。里山での田んぼの仕事を5年生が行い、川の水質や生き物の調査を4年生が行っている。長く活動を続けているとマンネリになりやすいので、何のためにやっているのかを常に問いつつ、地域の方が山の先生、田の先生となって思いを込めながら、子どもたちにふるさとのよさを伝えている。毎年、収穫したもち米で餅つきをするなど、年度末には地域の方々とふれあいを楽しんでいる。調整区域なので、他の方が入ってこられないため、地域の方々は、秦梨の子どもたちに地元に残って米づくりなどを受け継いでほしいと願っており、子どもたちもその願いを受けとめながら活動している。

また、今年は子どもたちの発信する力に重点をおき、6年生が「ジャパンアートマイル」で秦梨の良さは一体何だろうというのを再確認し、それをどうやって発信していくかを考えながら活動した。

【南比都佐小学校 名坂校長先生】

生徒数83名の小規模校。キャッチフレーズは「学校林と日野菜の学校」。過去の調査の中で自己肯定感が低いという結果が出ている。地域にある5小学校から同じ中学に進学する中で、何とか子ども達が南比都佐小学校出身という誇りを持つようにしてやりたい。その方法として森の学習を全学年で取り入れている。子どもたちが考えて取り組むことが一番だが、活動の形骸化を避けるため年々取り組みを変えている。地域に誇りを持つには、地域の方の関わりが大きく、いかに関わってもらえるかが今後の課題。ナラ枯れも出てきており、林業研究会の方に木の伐採を協力頂いている。

【司会】

今、何人かの先生から、長く続けている活動だけにマンネリ化への対応が必要との意見が出ましたが、この点についてご意見をお願いします。

【黒松内小学校 石丸先生】

黒松内小学校では、3年生が木について、4年生が川について、5年生が地域とのつながりでもち米づくり、6年生が大地ということで化石などの学習をしている。こういった学習を6年前から継続することで地域への愛着を深め、更に、5年生になったらもち米づくりができる、6年生になったら化石の発掘ができるということが子どもたちの楽しみになっているという良い点はある。黒松内町は自然が豊かであり、町内にある「ブナセンター」には学芸員さんおり、非常に恵まれた環境です。一年間振り返った発表は最終的に「黒松内町すごいね」で終わる。一方で、毎

年似たような活動となっており、マンネリ化については難しい課題。これから10年後の黒松内町をどんな町にしていきたいかを子どもたちに聞くと、自然豊かな黒松内にしたいという答えが返ってくると期待していたが、「黒松内町は何もない」や「イオンがほしい」などだった。子ども達にそぶりは勿論見せなかったが、正直がっかりした。こういったところに形骸化の影響が出ているのかなと思う。もっと子どもたちの心に根付いた活動を考えていかなければならないと思う。

【西栗倉小学校 栢山先生】

本日、空港やモノレールの中で発表の練習をして拍手をもらった。ふるさと元気学習を行っており、「げんき、笑顔、なかよし」をテーマでやっているが、ふるさとを元気にするなんて、少しおこがましいなと思っていたので、5年生は逆にふるさとに元気にしてもらおうと、地域の方にお話を聞いて、昔はどうだったなど、聞き、勉強した。子ども達は西栗倉の暮らしが良くわかり一層西栗倉が好きになっていった。また、過疎化で、高齢化も進む中で、こども世代が村に帰ってくるのが元気になる聞き、自分たちがいるだけで村が元気になるわかり、子ども達は本当に村の人から大切にされているとの思いを強くもった。そして愛されている自分たちが少しでも村の為に行動したいという思いは強くなり、地域に返していくようなことを検討している。

【司会】

こどもの視点をどう取り入れるかが重要な視点ではないか。先生がやらせるというスタイルではどうしても形骸化しやすいのではないか。子どもたちが自分で考えて、活動するという要素が組込まれていれば、子どもは常に新たな発見をするのではないか。子どもの力は大人の想像を遥かに超える。人との交流することによって新たなことを見つけていくことで、自信にもつながる。

【林野庁 今泉室長】

いきなりアイターンを持ち出すのではなく、何人かの先生が言われていたように、まずは目の前の子ども達が学校を卒業して一旦都会に出て行っても、またふるさとに帰ってくるような子どもに育てること、ふるさとへの愛着を育てること、もしくは年に何回か帰ってくるような子どもに如何に育てるかから始めることが大切だと思う。また、子どもたちを如何に育てるかは、持続可能な地域づくりと深い関係があるが、まず地域の方々が自分たちの視点でしっかりコミュニケーションをとって決めていくことが必要。

子ども達の発表を聞いていて、都市部の学校と農山村の学校では自然の見方が違うなと思った。都市部では、自然は守るものという感覚が強く、農山村では自然に生かされているという違いがある。見方の違う中での交流を試みるのも良いと思う。それにより、自分たちの地域の魅力を発見し、自信にもつながる。黒松内小学校の子ども達も都市部の子ども達と交流すれば、黒松内町の良さがより多面的に理解でき、ビルが良いか自然が良いか、現状とは違う見方が出るかもしれない。国語や社会という教科を同じようにやり続けてだれもマンネリ化と言わないように、自然から学ぶ、人と自然の繋がりから学ぶ学校の森もやり続けることだけで意味があり、それはマンネリ化ではないと思う。一方、何事もそうだが、学校の森を通じて5、10年後や30年後にどういったことを目指したいのかを明確にし、それに向かってPDCAを回して、毎年の取組みをどう進化させていくのかは大切なプロセスで、同じようなことをやっても、どこが違っているかをみんなで発見してみるのもいいかと思う。